

『僕の犬のドSなご奉仕』

著: 葵居ゆゆ

ill: いさか十五郎

予約されていたKホテルの部屋は予想よりも広かった。

ダブルベッドのほかにテーブルが一つ、一人がけのソファが二つあり、由鶴は店から持参した女王様衣装に着替えてそのうちの一つに座った。客の好みはまだわからないから、由鶴が使える道具も一通り持ってきてある。

照明を仄(ほの)暗(ぐら)く絞り、足を組んで向かいのライティングデスクについた鏡を見ると、頼りなげな表情をした自分と目があって、由鶴は隠すように仮面をつけた。

ちょうどそのとき、来訪を告げるチャイムが鳴った。二度続けて鳴らされ、由鶴は立ち上がりずにドアが開くのを待った。

ゆっくりドアがひらいて、廊下から人が室内に入ってくる音が聞こえる。由鶴の座った場所からは死角になって見えないが、落ち着いた足音が響き、ほどなく短い廊下の壁から背の高い男が姿を現した。

「……っ」

途端にあがりそうになった声を、由鶴はかろうじて飲み込んだ。

スーツ姿でそこに立っているのは、あろうことか——つい一時間ほど前にも会社で見た、城田だった。

(嘘……なんで城田くんがここに)

にわかに信じがたい事態に動揺して立ち上がりかけ、由鶴はぐっと肘掛を握った。

不意打ちに慌てるとろくなことがないのは、苦手だからこそよく知っていた。下手なことをして目の前にいるのが由鶴だとばれるほうが困る。

(きっと、僕だと気づいてないんだ)

部屋の照明は暗くしてある。顔は仮面で半分隠れているから、よほどのことがなければばれないはずだ。

それに——プレイなら、たとえこの場限りの偽りでも、由鶴のほうが城田の優位に立てる。

そう思うと、驚きとは別の、心臓の高鳴りがした。

「あなたがキーリ？」

立ったまま、片手をポケットに入れたポーズで城田が由鶴を見下ろしてくる。由鶴は唇を笑みのかたちにして顎を上げた。

「そう。きみがスレイブ志願の人だね。最初に、どういうプレイが好みか教えてくれる？きみの好きなように責めてあげる」

常より低い声を心がけて尊大に言い放つと、城田はすっと目を細めた。

値踏みするような視線だ、と由鶴は思う。とてもMIには見えない。命令されたいのだとママは言っていたし、普段の立ち居振る舞いや見た目とプレイの嗜(し)好(こう)が違うのはよくあることだ。だが。

城田は常と同じように——あるいはそれ以上に堂々と、落ち着いていた。そうですね、と呟いて思案げに由鶴を眺めたあと、おもむろに膝を折る。

「あなたの犬になって尽くしたい」

由鶴の足元、正面に片膝をついた城田は、騎士のような尊大な恭(うやうや)しさで由鶴を見上げた。

見つめられると、どくどくと心臓が跳ねた。

城田が。あの城田が、自分に向かって傳っている。

「あなたの命令に従って、あなたの快樂に奉仕したい」

「……っ」

「それが俺の望みです」

厚みのある唇が笑うように曲がる。じっと視線をあてたまま、城田は由鶴の履いたエナメルブーツに触れ、膝のすぐ下あたりに唇をつけた。

「っ、無礼、な犬め！」

咄(とつ)嗟(さ)に振った右手が、ぱしん、と城田の頬で鳴った。手の甲に痛みが走り、由鶴は左手でそこを押さえて城田を見下ろした。

「い、犬のくせに勝手に僕に触るな」

「失礼。恭(きょう)順(じゅん)の意でも示そうかと。どうすればいいですか？」

悪びれた様子もなく、城田は薄く笑った。頬の高い位置がうっすら赤くなっているのを見て、由鶴のほうが動揺してしまう。叩くなんて——素手で他人を叩くなんて一度もなかったのに。

「どうすれば、って……」

「だから、キーリの……キーリ様の好きなようにしますよ。あなたの望むとおりにしたい、っていうのが俺の希望です。犬ですから。それじゃいけませんか？」

懲(こ)りもせず城田はブーツに触れてきた。中にある由鶴の脚そのものを愛しむように、くるぶしのあたりからふくらはぎにかけて、光沢のあるエナメルを撫で上げる。まるで直に撫でられたような錯覚がして、由鶴はぱっと横を向いた。

「ぼ、僕のごことはどうでもいいんだ。僕の役目は、きみの望むとおりのプレイをリードすることだから」

「そうですか、じゃあ——」

待っていた、とでも言うように、にやり、と城田が笑った。

「脚に、キスさせてください」

「な——」

擽(どう)猛(もう)な肉食獣の笑みだった。ぐいと踵(かかと)を持ち上げられて、脚を振って振りほどこうとした由鶴は、また城田を傷つけるかもしれないと一瞬躊(ちゅう)躇(ちよ)した。他人を蹴る趣味はない。

城田は強(こわ)張(ば)った由鶴を見ながら、焦(じ)らすようにゆったりと唇を舐(な)めた。

「嫌なら駄目と言ってくださいいいですよ。主導権はあなたにあるんですから」

「だ、駄目だ」

「どうして？」

即座に切り返され、ぐっと言葉につまる。城田は目を伏せて、エナメルブーツに包まれた脚を視線で辿(たど)った。足首からブーツの途切れる膝、網タイツに包まれた太もも、ぴったりと張りついたホットパンツ。

「見、るな……キスとか……そういうのは、禁止だって、きみも知ってるだろ……」

蹴り飛ばして逃げたいのを押し殺して、由鶴はぎゅっと肘掛を掴(つか)んだ。精いっぱい
の力で城田を睨(にら)むと、城田は笑みを浮かべたまま首を傾(かし)げた。

「性行為は禁止ですよ。でもこれは、俺からあなたへの敬愛の気持ちを示す行為で
す。まさか、犬にブーツの上から口づけられただけで感じるんですか？」

「そっ、そんなわけないだろう！」

「じゃあ、問題ないですよ」

言うやいなや、城田はすっと由鶴の踵を持ち上げた。

「やっ……」

見せつけるように、唇が足の甲につけられる。キスしたまま見上げてくる城田の眼
差しは楽しげで、由鶴は息を呑(の)んだ。

そんなはずはない、と思うのに、エナメル越しに城田の唇の温度が焼けるように感じ
る。一度離れた唇は、今度はくるぶしあたりに押しつけられ、掲げられた脚がびくりと
震えてしまう。

本文 p60～65 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>